

## 尾台榕堂 医案①

文化六年己巳八月十日、胡蘆齋某先生、書を致して謂一婦人、狂を発す。小房に屏居し、鬱々として聊ぜず。面壁独語、或いは低笑し、或いは愀然として泣涕す。或いは外人来たりて窺うと謂い、或いは官吏来たりて捕うと謂い、或いは四隣、我が短を議すと謂い、或いは毎夜、盜来たりて貨財衣服を奪い去ると謂う。彼れを恐れ、此れを猜い、心情少しも安んぜず。急迫して死せんと欲す。余、之を診るに、脈沈弱、心胸跳動し、心下より小腹に至るまで満して微結し、処々悸を作し、飲食に節度無し。或いは終日食せず。

余、其の夫に謂いて曰く、「此れ過慮・憂愁の致す所なり。狂の陰症なる者なり。宜しく辞を軟かくして慰撫すべし。決して怒罵・詰責すべからず」と。乃ち柴胡加竜骨牡蠣湯を与え、兼ねて甘草小麦大棗湯を用う。大便日に利し、服すること三十余日、急迫少しく緩み、稍々眠りに就き、諸症随つて穏かなり。然れども動悸依然として除かず、夢寐怵惕し、時に驚いて起き、聳動して、大便又利せず。因りて大柴胡湯に転じ、鉄粉一錢を加う。大便快利し、疾苦日に減じ、薬を服すること六十余日にして全く愈ゆ。

次年の夏に至りて、経水来たらざること三月、前患復た発し、症候略々同じくして、上衝特に甚だし。故を以て少腹急結して拘痛す等無しと雖も、先ず桃核承気湯を与う。大便日に二、三行を得、次の月に至りて、経水利下す。是に於いて復た大柴胡湯加鉄粉を用う。已にして大便利せず、又更に芒消を加えて快利を得れば、則ち復た加鉄粉湯を用う。前後五十余日、諸症全く除き、家事を幹理すること平日の如し。爾後、肥健なること常に踰え、二子を育むと云う。